先秦漢語における“其”の機能について

山　崎　直　樹
（早稲田大学大学院）

This paper argues that “qi (其)” of Archaic Chinese in this sentence “王室其有間王位” is originally a anaphoric pronoun and has the two functions simultaneously, as follows:

1. “qi” focuses its preceding noun phrase.
2. “qi” changes its following predicate phrase into a nominal expression with subjunctive mood.

This paper also proposes the hypothesis which explanes how “qi” has obtained these functions, and intends to synthesize the various functions of the pronoun “qi”, which have been explaned respectively by many Chinese linguists.

1.　序
2.　先行諸説の検討
2.1.　主語との関係
2.1.1.　藤堂1953説
2.1.2.　Dobson 1962説
2.1.3.　まとめ
2.1.4.　主語の焦点化
2.2.　代名詞以外のものととらえる説
2.2.1.　品詞とその意味
2.2.2.　“其”の位置
2.3.　あるべき方向
3.　“其”の用法
3.1.　属格
3.2.　主語・目的語になる節
3.3.　従属節
3.3.1.　前提節
3.3.2.　帰結節
4.　結

1.　序

本稿[1]では，先秦漢語の“王室其有間王位.”（王室には王位をねらう者が出るであろう。）[2]のような文の主語と述語の間に現れる“其”を，三人称代名詞に由来し，次の二つの機能を同時にもつものととらえる。

甲．主語の焦点化。

乙．述語句を名詞的表現に転換することにより仮定法的ムードをもつ句にする。

そして，上記ふたつの機能をもつに至った過程を設定する仮説を提出し，従来，個別に説明されてきた“其”のいくつかの機能を統合することを目指す。

資料は主に『春秋左氏伝』を用いる。それは，本稿で扱う形式が生産的であるテクストは，他に『書経』『詩経』『論語』『礼記・檀弓篇』『国語』があるが，用例の絶対量という点では，『左伝』に勝るものはないからである。以下の用例で，（哀1），（昭26）のように記してあるものは，それぞれ『左伝』の「哀公元年」，「昭公26年」を指す。

2. 先行諸説の検討

2.1. 主語との関係

この“其”を主語との関係で論じたものに，藤堂1953と，Dobson 1962 がある。

2.1.1. 藤堂1953説

藤堂1953は，イェスペルセンの用語を借りて，この“其”を「想起詞 reminder」ととらえている。「想起詞」とは，「主題となる語をたえず反復して，その主題について述べていることを相手に想起させ，語脈を一貫する」ものである。そして次のように述べる；「上古漢語もまた主題詞を反復するのではないが，指示詞を想起詞的に用いて相手の注意を喚起しつつ，語脈をつなぐ……」(195)。

2.1.2. Dobson 1962 説

Dobson 1962 は，先に挙げた例のような文に対して，主語が強調のため外置され，主語の人称にかかわりなく，三人称の承前代名詞“其”が，主語のあった位置を埋めている，ととらえている（89—91)。

この，Dobson 1962 のいうところは，次のように解釈できる。日本語の例でいえば，主語が外置されていない形式が，(1)a の文とすれば，外置されたのは，(1)b の文である。

(1)a ［南極は氷の世界である］

b ［南極 i［それ i は氷の世界である］］

（i＝同一指示）

Dobson 1962 は，(1)a b に挙げた現象と類似のものととらえているのであろう。しかしこの場合，“其”をあくまで代名詞として使っていることにすると，次の，

(2)a 吾其奔也。(僖23)「わたしは逃げよう。」

b 女其行乎。(僖24)「おまえは行け。」

のように，主語が明らかに一・二人称の代名詞である場合が問題になる。Dobson 1962 はこれについて，特に説明をしていないが，［代名詞］→［主語外置の標識］という変化の過程で，人称の一致の機能を失ったとする説明をすることは可能である。本稿の問題と直接に関連はしないが，三人称代名詞がコピュラに変化していく過程で，人称の一致を喪失し，主語が一・二人称でもその三人称代名詞由来のコピュラを用いる言語があることが，Benveniste 1966 に述べられている（邦訳177)。上の解釈も不自然なものではあるまい。

2.1.3. まとめ

上述の二説は，次のような意義をもっている。つまり，一般に“其”という表記をもつ形態素は三人称代名詞とされているが，先の例の文中の“其”もやはり，①品詞としては三人称代名詞で，機能的には主語とかかわりをもち（藤堂)，②その機能とは，主語を強調のため外置したという標識である(Dobson 1962)。

2.1.4. 主語の焦点化

本稿では，§ 2.1.3 で述べた機能を，“其”のもつ主要な機能のうちの一つと認めるが，Dobson 1962 のいう「強調」はもう少し詳しく定義することができる。まず，次の例を見られたい。

(3)a 子貢曰；“如有博施於民，而能済衆，何如．可謂仁乎？” 子曰；“何事於仁．必也聖乎．堯舜其猶病諸．”（論語・雍也）「もし広く民に恩恵を施し，多数の民を救済することができたら，どう評価すべきか。仁者と呼んでよろしいか？」「仁者どころではない。きっと聖人だろう。堯舜ですら民の救済には心を悩ましたではないか。」

b 趙嬰曰；“我在，故欒氏不作。我亡，吾二昆其憂哉。”（左・成5）「私がいるから，欒氏が謀反を起こさないのだ。私がいなくなったら，兄上二人もどんな迫害を受けるか。」

c 天其或者将建諸，君其礼焉。(左・僖23)「天はこれ（晋の公子）を助けて晋の君にさせようとするのかもしれない。君は公子を礼遇されるがよろしい。」

(3)a b の文で，“其”の前の主語は，談話に新しく導入された情報である。(3)c では，対照的に用いられている主語である。種々の

文献中の例を見ても，“其”の前にある主語は，この二つのどちらかにあてはまる場合がほとんどである。この“其”は，新情報である主語や，対照的主語をよりいっそう際立たせ，聞き手の視点をそこに集中させるはたらきをしているのではないか。そうすると，(3) a b c の機能を果たす，この標識“其”は，「主語の焦点化[3]」を行っている，と定義したほうがより正確であろう。

代名詞で主語を外置し，焦点化をおこなう言語は多い。特にピジン・クレオール言語に多いが，例を一つ挙げておく。

HCE（ハワイにおけるクレオール英語）

A. sam gaiz samtaimz dei kam.（時々，何人かがやってくる。）［下線部＝標識］

some guys sometimes they come.［逐語訳］

B. jaepan gaiz dei no giv a haeng, do.（でも日本から来た連中はおもしろがらないよ。）

Japan guys they no give a hang, though.［逐語訳］

（Bickerton 1981，邦訳37より）

この言語では，不定主語（Aの例）と対照的主語（Bの例）の場合に標識が現れる。

上で述べた「主語の焦点化」を日本語の例で解りやすく述べると，以下のようになる。例えば，我々が，テレビで南極を特集した番組を放送するとき，その番組の冒頭のナレーションには，「南極は氷の世界である。」という文よりも，「南極，それは氷の世界である。」のような文を好むであろう。なぜならば，談話に最初に登場する情報である「南極」を強く印象づけるには，後者の文のように「南極」が焦点化された文のほうがふさわしいからである（もっともこの種のレトリックは，日本語では今では陳腐なものであるが）。

2.2. 代名詞以外のものととらえる説

2.2.1. 品詞とその意味

過去の多くの研究・注釈書は，この“其”を次の(4) a に挙げるような品詞ととらえ，(4) b に挙げるような意味をもっているとする。

(4) a 副詞，動詞，助動詞，語気助詞……

b 推測，疑問，反語，将然，未来，命令，意志……

先に本稿の立場を明らかにしておく。筆者の見た限り，主語と述語の間に“其”が現れる文は，(4) b に挙げた意味をもつ場合がほとんどである。この点に関して，先行諸説に異論を差し挟む必要は認められない。しかし，(4) a に挙げられた品詞とする説は，“其”の現れる位置からして認められない。このことを次に述べる。

2.2.2. “其”の位置

主語のある文では，“其”は主語の後に続き（主語に先行することはない），種々の助動詞，副詞に先行している。

(5) a 晋其庸可冀乎。（僖15）「晋はたやすく手にはいれられまい。」

b 晋之公室其将遂卑矣。（昭16）「晋の公室は衰えようとしている。」

c 天其或者正訓楚也。（哀1）「天がひょっとする楚を正し，いましめようとしているのかも知れない。」

d 楚師其猶在敝邑之地下。（襄26）「楚の軍隊はまだわれらの国にいるだろう。」

“其”のある位置は，普通の文なら主語のある位置である。副詞や助動詞・動詞等の占める位置とは思われない。Dobson 1962 が，「主語のあった位置を埋めている」とした観察は正確である。また，語気助詞とする説は，不自然である。語気助詞は，ふつう語・句・文末につく。この“其”は述語句に先行しているのであって，主語句に付加されているのではない。それは，次の，

(6) a 其亦使逆君。（昭28）「今になってご主君を迎えさせようとするのか。」

b 其造於竟。（昭28）「国境に行きなさい。」

のように，先の幾つかの文に比べ，主語がないところだけが異なるとしか思えない文も多

く存在するからである（本稿は，主語のあるものから話を始めたが，この問題は(6)のように主語のない文も含めて論じなければならないものである。このことは後で触れる）。

その他，「発語の辞」とする説もあるが，これも，位置の上から無理がある。ふつう，“夫”など「発語の辞」に使われるものは，文頭（つまり主語があれば主語の前）にある。発語の辞が，必ず主語と述語の間に現れねばならぬ理由はない。

意味との関連からであるが，(4)bで挙げたような多彩な意味をもつ「副詞，助動詞，動詞」は考えにくい。語気助詞ならば，コンテクスト次第で多様な意味をもつことが可能だが，出現する位置が異なることは既に述べた。

その他，特筆すべき論考として，俞敏1949，1987がある。これらでは，先秦漢語の“其”を古代チベット語との関連で論じているが，本稿で扱っているような“其”については，古代チベット語の対応できうる形態素を挙げておらず，「仮定の語気“虚擬口気”」を表す，句末に現れるのではない語気詞，としている（俞敏1987，82）。そして，「仮定の語気」が(4)bに示したような多様な意味を生むとしている。「仮定の語気」を基本義とする分析には異論はなく，賛成するが，文中に現れる語気詞を認めるのは，先にも述べたが，先秦漢語の文法体系全体（もちろんこれはまだ全貌が明らかになっているわけではないが）からみて，どれほど妥当性のあるものだろうか。

2.3. あるべき方向

以上に二種類の説を紹介したが，その長短をまとめてみる。まず，“其”が次の二つの機能をもっていることを認める。

(7)a　主語の焦点化。

b　「仮定の語気」を加える。

§2.1.で紹介した説は，(7)aをとらえようとしているが，(7)bの説明はできない。§2.2.で紹介した説は，(7)bの現象を述べてはいるが，品詞としての地位の説明は不十分であり，また(7)aの説明はできない。

望ましい解決は，(7)a bの機能を同時に担えるものとして，“其”を定義することである。そのために，次の章で代名詞“其”の機能として考えうるものを順にみていく。

3. “其”の用法

3.1. 属格

“其”は三人称代名詞の属格的な用法をもつ（ここでいう「属格」とは名詞の決定詞として使われるというぐらいの意味である）。

(8)　観起i之死也，其i子従在蔡……(昭13)「観起が死んだとき，その子の従は蔡にいて……」

3.2. 主語・目的語になる節

また，“其”は，文の主語，動詞・前置詞の目的語になる節の主語の位置に現れることもある。

(9)a　其使終饗之，亦不可知也。(哀15)「あるいはそれ（天）が結局は（陳氏に）それ（斉）を受け持たせるのかもしれない。」

b　而恐其使余往也……（昭30）「(王が)私を将として遣わすのではないかと心配し……」

c　以其不生得也……（昭29）「それ（竜）は生け捕られないから……」

この用法は上述の属格用法の拡張で，“其”を主語にもつ節は，すでに節全体が名詞的表現になっている，としても構わないであろう（またこの考えかたは特に目新しいものではあるまい）。この名詞的表現になっている節は，英語の“It is hard to solve the problem.”の下線部のような構造（つまり不定詞句）に，名詞的性質をもっているという点で，機能的には近いものと思われる（英語の“to”と漢語の“其”が同じだというのではない）。そして本稿で主張したのは，このような用法の発展として，次の§3.3.で述べるような用法が現れたのではないかというこ

とである。

3.3. 従属節

3.3.1. 前提節

ある種の複文を次のようにわける。

(10) 無理が通れば，道理がひっこむ。

［前提節］　［帰結節］

英語で，仮定法というムードをもつ複文が，上の二つの節に分けて分析されることから，ヒントを得た。［前提節］とは，談話の中に新しい場面を仮定し，話し手と聞き手の間に，共通する発話の前提を築くものである。そして，その結果どういうことになるであろうか，と仮定するのが［帰結節］である。

“其”を主語にもつ節は，このような文の前提節として使われることがある。以下の例で，下線部＝前提節。

(11) a　其亡也，以民為土芥。（哀1）「それ（国）が滅びるときは，民を土や芥のように扱うものだ。」

b　其有顚越不共，即劓殄無遺育……（哀11）「わがまま勝手で命令に従わないのがいれば，断ち切って滅ぼし，子孫を残さず…」

c　其委諸伯父，使伯父実重図之。（昭32）「（私どもは）これらの仕事をおじ上にまかせ，おじ上にしかと重ねて取り計らってもらおう。」

d　若其無成，君無辱焉。（昭26）「もし君が成功しなくとも，君の恥にはならない。」

e　雖其善祝，豈能勝億兆人之詛。（昭20）「たとえそれら（神官たち）が心をこめて祈ったところで，どうして億兆という民の呪いに勝つことができようか。」

(11) a — e の前提節は，条件，仮定，譲歩…などの意味で使われている。これらの節は，基本的には仮定法的ムード（本稿はこの用語を英語の「仮定法」を念頭において用いている）をもつがゆえに，このような前提節を形成できる，としたい。それは，“其”を主語にもつ節は，名詞的表現であるがゆえに，肯定／否定の判断とは無縁であり，時制とも無縁であるから，未完了／未実現の出来事を叙述すると解釈されるだろうからである。英語と対照すれば，ここでの用法は，“To say frankly, you are wrong.”のような文の不定司句（下線部）を思い起こさせる。

(11) d e の“其”を“若，雖”の接尾辞とみなす説もあるが，そうしなければならない積極的な理由もないようである。これらの語の後に必ず“其”があるわけではないのだから。むしろ，これらの語が導く前提節では，“其”をもつ節がよく使われることから，複合しているように解釈されるようになったという仮説を提出することもできる。

3.3.2. 帰結節

帰結節に“其”を主語にもつ節が使われることもある。以下の例では下線部＝帰結節。

(12) a　不穀有事，其告子也。（昭12）「わたしがおまえに用事ができたら，呼びにやろう。」

b　牛雖瘠，僨於豚上，其畏不死。（昭16）「牛はやせていても豚の上に倒れれば，豚は恐れて死ぬに決まっている。」

c　諸侯不知，其謂我不敬。（昭20）「諸侯はそれとは知らないで，我々が神を敬わないのだというだろう。」

d　王心弗堪，其能久乎。（昭21）「王の心は（その鐘の音に）堪えられないだろうから，王は長生きできないだろう。」

e　是夫也，其過三歳乎。（昭29）「この男は，きっと三年も永らえないだろう。」

上例の帰結節は，意志，推測，反語……などの意味をもつ。これはやはり，“其”を主語にもつ節が仮定法的ムードをもつことが原因で，コンテクストにより，上記の様々な解釈を許す表現になったものと思われる。以下に示す英語の独立不定詞構文と，構造の面からも，機能の面からも類似の構文であろう。

(13) a　To be young again!「もう一度わかくなれたら！」

b　To think that a boy should go ab-

road for himself.「考えてもごらんなさい，男の子が独りで外国に行くなんて。」
c　I to marry him!「わたしが彼のお嫁さんになるなんて！」

さて注意していただきたいのだが，(12)eは，実は，「前提節」が「節」になっていない。“是夫也”という一句のみである（「この男について言えば」ぐらいの意味であろう）。しかし，帰結節に密着しているものではないことは，助詞“也”の存在が示している。そして，本稿が主張するのは以下のことである。つまり，(12)の諸例のような帰結節をもち，「前提節」が(12)eのように名詞句一個になり，それが(12)eよりも，もっと帰結節に密着したとき，本稿で問題にしている，

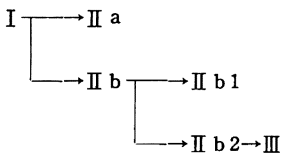
(14)　［王室　　［其有間王位］］（昭26）
　　前提節由来　　帰結節

のような構造ができあがった。

4.　結

これまでに述べてきたことをまとめると次のようになる。

・三人称代名詞“其”の用法の展開



Ⅰ．属格
Ⅱ．名詞的表現になった節の主語
　a．主語，目的語になる節の主語
　b．従属節の主語
　　1.　前提節の主語
　　2.　帰結節の主語
Ⅲ．外置構文の標識

さて，この説明は，筆者自身が挙げた，この問題の妥当な解決として認められるための二つの条件（§ 2.3.）

甲．主語の焦点化（の説明）。
乙．仮定のムード（の説明）。

を満たしているか。

乙は問題ない。甲については，次のように言える。つまり，主語と述語の間に“其”が挿入されることにより，主語は，［其＿＿］となる帰結節の，前提節としてあつかわれる。前提節とは，新しい情況などを，聞き手と話し手の共通の前提にするため，もちだすものであるから，［前提節あつかい］⇨［焦点化］といえる。よって，“其”の挿入は，§ 2.1.2 で挙げたハワイのピジン英語が，代名詞の挿入によって主語を外置し，焦点化するのと，同様の効果をもたらすことになる。［主語―其―述語］という形式の構文だけをとりだして“其”の機能をいうなら，主語を外置する役割を果たしているといってよい。

その他，“其”を代名詞由来のものと考えるなら，その前の主語が一・二人称の代名詞である場合，“其”との人称の一致が問題になるわけだが，これは，§ 2.1.2. で述べたように，標識化する過程で一致をする機能を失ったと解釈したい。思うに，上述のⅡb，Ⅲの“其”はすでに代名詞というより，文法的な標識に近くなっているのではないだろうか。

また，“其”は上のⅡaの場合（誰にでも代名詞と認められる場合）でも，話し手／聞き手を指すことはよくある。

(15)　若驪i（話し手）也，則君知其i出也，而未知其i入也。（定1）「わたしなどは，君はわたしが（お供をして）出た心は知っているが，わたしが帰るということは知らない。」

“其”の前に一・二人称の代名詞がくるのもそれほど不自然ではないのではないだろうか。

〈注〉

1）本稿は，中国語学会第38回全国大会（'88. 10. 30. 於神戸市外国語大学）で口頭発表し

たものの一部に手を入れ文章化したものである。当日，コメントを寄せて下さった方々に感謝を申し上げる。また，文章化にあたって，古屋昭弘先生，畏友秋谷裕幸君にいろいろご指摘いただいた。あわせて感謝を申し上げる。無論，本稿の不備な点はすべて筆者一人の責任に帰するものである。

2) 現代日本語訳は，『新釈漢文体系33 春秋左氏伝』（鎌田正，明治書院）に負うところが大きい。

3) 焦点化とは，発話の中にある要素を特に際立たせる（聞き手に強く印象づける，聞き手の視点をそこにひきつける）作業である。具体的には，ストレスを置く，有標な位置に移動させる，といった操作であることが多い。本稿で問題にする構造は，「有標な位置への移動」を焦点化のための操作として行っている。

以下，英語の焦点化の例を幾つか挙げる。以下の例では，aに比べてbは下線部が焦点化されている。

1 a. A car ran over Miké yesterday.
  b. <u>Miké</u> was run over yesterday.
2 a. Miké was run over yesterday .
  b. It is <u>yesterday</u> that Miké was run over.

〈文献目録〉

Beveniste, É. 1966. <u>Problémes de Linguistique Générale</u>. Éditions Gallimard. Paris.〔邦訳〕岸本通夫監訳1983.『一般言語学の諸問題』。みすず書房。

Bickerton, D. 1981. <u>Roots of Language.</u> Karoma Publishers. Ann Arbor.〔邦訳〕筧壽雄他訳1985.『言語のルーツ』大修館書店。

Dobson, W. A. C. H. 1962. <u>Early Archaic Chinese</u>. University of Tronto Press. Tronto.

藤堂明保1953.「上古漢語における指示詞の機能」。『日本中国学会報4』，1—17.〔所収〕藤堂明保1987.『中国語学論集』。藤堂明保中国語学論集編集委員会。汲古書院。

俞敏1949「汉语的“其”跟藏语的gji」。『燕京学报』，37期。〔所収〕俞敏1984.『中国語学論文選』，358—71. 光生館。

俞敏1987.『经传释词札记』。湖南教育出版社。